

恩納間切時代の 製藍

沖縄の染織物に欠かせない藍色は、琉球藍という天然染料から生み出されます。琉球藍の原料はリュウキュウアイというキツネノマゴ科の多年植物で、沖縄方言では「エー」「イエー」などと呼ばれています。琉球藍は、収穫したリュウキュウアイの葉を水に浸して発酵させた後、染み出した藍成分に石灰を加えて沈殿させた泥状の染料です。

現在では、本部町伊豆味を中心にやんばる地域の一部で琉球藍の製造が行なわれているようですが、かつては恩納村でも換金作物として藍の栽培が行われていました。

『恩納村誌』によると、恩納間切で藍の栽培が行なわれるようになったのは、一八五七（安政三）年頃と記されています。金武の男性が貧窮のため本部へ奉公に行き、本部で有望な換金作物になっていた藍苗を持ち帰ったといえます。故あつてその人は恩納間切名嘉真に移り住むことに

なり、持参した藍を栽培したことが、恩納間切における藍作の始まりと言われています。それが発端となり、藍作は名嘉真はもちろん、安富祖、喜瀬武原、恩納、山田あたりまで広がったようです。

自給自足や物々交換で成り立っていた生活の中に、徐々に金銭というものが入りこむようになり、藍も格好の換金作物として山原船で那覇方面へ輸送されるようになります。そのため甘藷や麦など、食料作物の栽培に適した畑で藍を



リュウキュウアイ

栽培する者も出るようになり、一八六九（明治二）年には、「飯料作場に藍作を禁ずる」（同治八）年恩納間切惣耕作當日記」という示達が出されたほどでした。

政府は一八七七（明治十）年、第二回内国勸業博覧会を行いました。これは国内の産業振興のために、将来的に有用で商業的に成り立つ物、技を極めた物を一同に集め、出品者の向上心や競争心を刺激し、産業の増進を狙っていたようです。一八七九（明治十二）年の廃藩置県後も藍の栽培は盛んになります。そのような中、仲泊出身の長浜善用が恩納間切総代として、一八八一（明治十四）年に開催された第二回内国勸業博覧会に山藍を出品し、三等有功賞を授与されたことが記録に残っています。この受賞は、恩納間切から出品された藍が、産業振興に有益であると認められたと言っても過言ではないでしょう。善用の孫によると、内地から持参した大きい銅貨に似たようなものが保存されていたらしいのですが、それがおそらく三有功賞の牌ではなかったかと思われます。しかし残念ながら、沖縄戦で紛失してしまつたようです。

安富祖区では、集落から離れた山間部の河川